はしがき

本書は「人の生き方の変容を問う　～大人と子ども・男と女の境界線～」と題し、戦前から戦後、そして現在にかけての人の生き方がどのように変わったのかを様々な角度から探るものです。

戦前の天皇主権の大日本帝国憲法下での教師や父母の言うことを素直に聞き入れるという忠孝の精神は、戦後間もなく国民主権の日本国憲法に変わり、その後の高度経済成長が進展するとともに次第に色あせることになり、それを良しとしない人たちの「昔はよかった」と嘆く声が新聞の投書欄に数多く見られる時期があったのですが、その一方では、上意下達式に命令する大人に対する子どもの反発心が高まり、後の学校崩壊、家庭崩壊となるような事件が全国各地で多発したのです。何ゆえにそのようになったのか、そして今、その「大人の都合による押しつけ」といわれる言動は解消されたといえるのでしょうか。

男と女の関係ですが、戦前は「男に尽くすために女が存在する」という表現が大げさではないほどに男尊女卑の社会だったようです。それが戦後の新憲法で男女同権が謳われ、男女共学による学校教育が進展すると、「戦後強くなったのは女性とストッキングだ」と言われる時期もあったのですが、戦後70年を経過した今、男と女の関係、ならびに女性の立ち位置としてはどのようにあるのでしょうか。

日本の人口は次第に減少していますが、それは何と言っても出産数の減少によるものです。なぜ、出産数が減少したのかを考えると、それは第一に、子育ての主体者である母となる女性の出産と育児に対する心境の変化にあると思われます。

今ではノーマライゼーションが謳われ、人として生きるための権利は障害者を含むすべての人が獲得できるように進展しつつあるように思うのですが、ニューハーフといわれる人や性同一性障害者の抱える悩みなどが多くのマスメディアに取り上げられるなど、そうした人の立ち位置が大きく変わることになっています。

大人と子どもの関係において、大人が幼稚化し、子どもが早熟化することで双

方の距離が近くなったといわれるのですが、では、その大人とはどういう人のことを指すのでしょうか。そして、その大人の幼稚化とはどのような形で進み、子どもはどのようにして早熟化するのでしょうか。

人と人が関わり合う場として、バスや電車等の車内、人が行き交う道路、図書館等の公共的場所……における人としてのルールやマナーについてはどのように変わったのでしょうか。

現在、どこに行っても電子機器類を持っている人の多さが目につきます。そうした電子機器類が一台あれば、電話で話したり、Eメールなどで交信をしたり、最新の情報をいち早く検索・収集したり、各種のゲームで遊んだり、場合によっては自宅の家電製品の遠隔操作さえも可能な大変便利なモノです。そうした機器の導入は人の生活をより便利にしたといわれるのですが、その一方では、どのような課題をもたらすことになったのでしょうか。

上記の項目に加えて問うのは、人の他人に対する気遣い・気配りです。何も必要以上を求められるものではないのですが、他の動物とは違う形での人として他人への迷惑をかけないことを前提にし、その上での自己主張や自己表現であってほしいのですが、はたしてその観点から見て、人の生き方は変わっているのでしょうか。

2017年６月

著者

人の生き方の変容を問う
――大人と子ども・男と女の境界線――

目　次

はしがき …… i

序　章　大人と子ども …… 1

第１章　戦前と戦後の考え方と生活 …… 7

第２章　戦前・戦後と現在の考え方と生活 …… 17
第１節　人と犯罪 …… 18
（１）子どもと犯罪　20
（２）大人と犯罪　32
第２節　子育て …… 52
（１）子育て論　54
（２）子育て論と子育て　59
（３）子育てに関する知見　65
第３節　情報と生活 …… 67
（１）ラジオと漫画　67
（２）テレビ　69
（３）情報通信　79

第３章　人の外面的、数量的変化 …… 87
（１）人の一生　87
（２）人口と年齢層の推移　88
（３）体位と体力、運動能力等　90
（４）進路　94
（５）家庭・学校関連事業　98
（６）意識の変化　111

第４章　生活上の変化 …… 121
第１節　日常生活における変化 …… 121
第２節　服装と化粧 …… 126
第３節　性とその立ち位置 …… 128

第４節　日常生活で気になること …… 139
（１）気になる言葉　139
（２）気になる行為　141
第５節　その他 …… 145

第５章　ルールとマナー …… 153
第１節　交通ルール …… 153
（１）歩行者とルール　154
（２）自転車とルール　157
第２節　マナー …… 162
（１）車内でのマナー　162
（２）図書館とマナー　169
（３）マスクとイヤホン　171

第６章　人間関係模様 …… 175

終　章 …… 193

あとがき …… 201

新聞資料Ⅰ …… 204
新聞資料Ⅱ …… 210

序 章

大人と子ども

人が人として変容したのか否かを問うにあたって、人の社会を実質的に動かしている大人とはどういう人のことを指すのでしょうか。

広辞苑によると、大人とは「十分に成長した人。一人前になった人。成人。考え方・態度が老成しているさま。分別のあるさま」としています。

また、インターネット（以下ネットと略）上のウィキペディア（http://ja.wikipedia.org/wiki/　2015.12.15から抜粋）では、以下のように述べています。

> 大人とは、精神構造が熟成していて目先の感情よりも理性的な判断を優先する人、もしくは自立的に行動し自身の行動に責任の持てる人の事を指す場合もある。別の表現では、目先のことだけに感情的に反応したり単細胞的に反応したりせず、長期的・大局的なことを見失わず理性的な判断ができる状態、とも言えよう。また、「子供」というのが依存状態にあるのと対比して、自立的に行動できる状態とすることもある。また、「子供」というのは、自分のやったことの後始末も自分でできず親に「尻拭い」をしてもらう状態であるのに対して、「大人」は自身のやったことについてはしっかりと自分自身で後始末をするなど自分の行動に責任の持てる人のことを指す場合もある。「子供」は往々にして無軌道で、衝動的で、自分の行動を律することができないのに対して、「大人」は自分を律することができる人、というニュアンスになることもある。

そこで、筆者は以下のように考えます。

㋐ 成人した（現在の日本では20歳になった）人。㋑ 生きていくために自立した生活力のある人。㋒ 生きる上で、自らを律し、他者に対しての配慮ができる人。㋓ 物事に対して客観的な判断力ができ、社会的な責任を負える人、のことです。

そうすると、㋐㋑㋒㋓の条件を当てはめてみて、それぞれの条件に大きく外れた場合には大人とはいえないのですが、現実の社会では形式的な㋐ の年齢で

区別することが一般的です。

つまり、改めていうことではないのですが、人の社会は大人と大人とはいえない成人と、そして子どもが混在する中で日々の生活が営まれていることになります。

人は年齢的に成人に達し、形の上で大人の仲間に入ることになれば、それまでに周りの大人たちから当然のようにあれこれと言われていたであろうことが少なくなるでしょうし、成人したのだから、自分の言動に責任を持つべきだ、などと意識し始めるのが一般的です。ですが、そういう意識が希薄なままに年齢を重ね、成人に達し、そして親となる者も少なくないのです。

人の親については、結婚しない未成年男女間においても親となることは珍しいことではなく、年少であろうとも子ができたときから必然的に親となります。無論、成人で結婚した男女が親となる場合の方が圧倒的に多いことはいうまでもないことです。しかしながら、そのいずれによって親になったとしても、必ずしも人として大人といえるわけではないのです。

そうした大人と子どもの関係について、加藤秀俊氏は『子どもの文化史』（チャイルド本社　1984　121頁）の中で次のように述べています。

> 現代社会というのは「おとな」と「子ども」との境界線がぼんやりし始めている時代である。
> すくなくとも、「子ども」という観念で意味される年齢の上限がすこしずつせりあがってきている時代である。「子どもの早熟化」は顕著になってきているし、いっぽう大人の側の幼児性も社会のいたるところにみうけられる。とすれば、まことに皮肉なことだが、現代社会はことごとく未成熟な人間たちによって充満しており、そこには「おとな」と「子ども」とを峻別するような原則がみあたらないようにも思えるのだ。

加藤氏は、現代社会は「おとな」と「子ども」との境界線がぼんやりし始めていると言っているのですが、それを裏返せば、それ以前は大人と子どもの境界線がはっきりしていたことを示すのです。

また、「子どもの早熟化が顕著になる一方で、成人の幼児性が至る所で見受けられ、大人と子どもとを峻別するような原則が見当たらない」ほどだと言うのです。そしてまた、ここでの「子どもの早熟化」とは主として身体的な面を、「大人の幼児性が見られる」は精神的な面を指していると思われます。

佐藤直樹氏は「のっぺりした「大人／子ども」時代が始まった」（『別冊宝島462　子どもは変わった』宝島社　1999　225頁）の中でテレビの影響による大人と子どもの関係の変化を次のように述べています。

> 文化が伝承されるなら、文字が読めなくても、言葉がしゃべればいい。テレビは7、8歳どころか36ヶ月で理解できるんです。だとしたら、文化が伝達されるのに大人である必要はない。つまり大人と子どもの境目がなくなって、中世と同じように、子どもは「小さな大人」である状況が生れるのです。テレビが理解できなければ動物と一緒で、理解できればみんな大人。あるのは年齢の違いだけです。動物である時期を過ぎて、一定の年齢になると、「大人／子ども」としか区別できない時期に入り、それからあるところで老人になる。近代には存在した明確な「子ども期」がなくなり、「大人／子ども」ののっぺりした状態が長く続くのです。現代の資本主義が中世化しているというのは、まさにこの点、子どもが「小さな大人」化している状況にあるからです。

佐藤氏は「テレビが理解できれば大人、違うのは年齢だけで、子どもが小さな大人化している」と言うのですが、それは今、大人と子どもの関係が「のっぺりした」ものであって、「テレビが理解できれば大人」という範疇に陥ることになった現実をもどかしく捉えることになっています。

小谷敏氏は『子ども論を読む』（世界思想社　2003　73－74頁）の中でマンガ文化を通じて、大人と子どもの関係を次のように述べています。

> 理念として作られた「子ども期」は明確な終わりを持たない。「子ども」という存在に作られたが、それを「大人」と区別する年齢段階が提示されることはなかった。しかも「子ども文化」に対抗するはずの「大人文化」は曖昧なものにすぎない。こうして現実の子ども期は長期化し、またある意味では永遠のものになってしまった。（中略）　したがって「子ども」はいつまでたっても「子ども」のままで「大人」になることはできない。その結果「子ども文化」を捨てられない成人が非常に多くなり、さらにはそうした成人が親になることで、親と子の文化的な差異は消滅してしまった。（中略）　1960年以降を「子ども」として過ごした現在の成人は「子ども文化」を捨てることができず、「子ども」のまま成熟してしまった。すなわち、マンガ世代とは「大人」に変態することができないネオテニー（幼生成熟）なのである。（中略）　成人の文化が子どもと同じならば、成長して「大人」になる必要はない。まして、将来の目標を持つ必要などなく、現在を「子ども」として楽しめればよいことになる。

小谷氏は「1960年以降を子どもとして過ごした成人は子ども文化を捨てられないままに成人し親になったが、子ども文化と大人文化が同じならば、成長して大人になる必要はなく、子どもとして楽しめればよいことになる」として、子どもの文化を持ったまま成人年齢に達することを「現代の成人は文化的なネオテニー（幼生成熟）にある」とするのです。

このように上記の３氏は子どもの文化を通して、大人と子どもの関係を述べるのですが、そこから読み取れることは、子どもの早熟化、精神的に大人にならない成人が人の親となる割合が増加していることで共通し、そういう世代が担うであろう日本社会の将来を危惧することになります。

大人と子どもには身体的容量と機能に違いがあり、そこから生じることとして、大人にできて子どもにできないことがあります。ですから、子どもの身体的成長にとって負の要因になることを避けるための処置として、大人には許されて子どもには許されない禁止事項が設けられることになっています。例えば、飲酒や喫煙は成人年齢に達した者が認められ、自動車の運転免許取得は18歳以上として法律で定められています。また、判断力に基づくこととして、成人に達すると選挙権を獲得できます。そのほかには、子どもだけでは利用できない施設があったりもします。このように、子どもとして制限されていることがある中で、逆に、乗り物、各種の施設の入場料等の公共料金の類は子どもであるがゆえに低額での利用ができるようになっています。

そうしたことについては今も昔も大きな変化はないと思われるのですが、ではここでいう「大人と子どもの境界線」とは何を指すのでしょうか。

それを挙げるとすれば、何といっても大人一般は１人で生きていくための何らかの生業を持つことになります。その生業により子どもは食べ物や着る物、住む場所、学校で必要とするモノ、娯楽となるモノ等を得ることができるのですから、ここでの境界線とは「生業による生活力の有無」といえます。

いつ頃からか、「子どもの早熟化、小さな大人化」などと、そして、大人は「子ども文化を持ったままの成人、大人にならない成人」などと言われ、それが大人と子どもの間の距離を近くするというのです。

その「子どもの早熟化・小さな大人化」の「子どもの早熟化」とは、今の子どもは決して大人ではないのに、体位的な成長が早く、性的にも早期に成人に近くなることを示し、「小さな大人化」とはテレビ・ビデオ・ゲーム機・漫画・携帯電話類・パソコン・服・化粧等、法律で禁止されていないモノを成人と同じように使い、身につけ、“大人っぽく”時間を過ごすことになっています。

そして、「子ども文化を持ったままの成人、大人にならない成人」は、子どもの頃に親しんだ上述のモノの多くを持ったまま成人し、生業を持つことで見かけは大人ですが、先に筆者の示した大人の条件㋐㋑㋒㋓中の㋐㋑は満たしたとしても㋒㋓を満たさないで完成してしまう成人のこと、のように解釈しました。

かつて、その境界線が明確であった頃、境界線越しに大人から子どもへ発する言葉の多くは今流行の言葉でいえば、上から目線であり、それを子どもが聞き入れることが当たりまえの時勢の中では、それに背くことは親だけでなく社会に逆らうことになる、という認識が子ども一般にあったと考えられます。

ところが、高度経済成長が進むにつれて、欲しいものが簡単に手に入るようになります。それに加えて、そこにテレビの普及が人の人としての生活に大きな変化をもたらすことになります。それは子どもが親や学校の教師のいうことより、テレビ映像が発信する情報に感化されることになれば、“子が親の言いつけを守るという常識”に異変が生じることになり、そのあたりから「境界線がぼんやりし始めている」ことになったのではないかと思うのです。